陰陽師はじめました

ライトハウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陰陽師はじめました

【Ｎコード】
Ｎ９３０５Ｚ

【作者名】
ライトハウス

【あらすじ】
ごく普通の中学校に通う
進藤優斗は母の仏壇においてある
一枚の紙を見つけたとたんに意識がなくなり
倒れた…気が付くとそこは広い草原その世界は異世界と呼ばれているらしい。
そうここで陰陽師としての生活が始まる…
得体のしれたい妖や魔物時には人間とも
戦っていく毎日に変わる。俺は札を使って

対抗していく…

果たしてなぜ優斗はこの世界につれてこられたのか？

非現実的ストーリーである

第一話　進藤優斗

「ただいま、っても誰もいねぇか」

俺の名前は進藤優斗（しんどうゆうと）
地元の中学校に通う
ごく普通の中学二年生だ。
俺は小６ころに母親を亡くしていて
今は父親との２人暮らしだ。と言っても
父親はほとんど家にはいなく
お金が置いてある。これでいつも夜ご飯を
すましている。
昔は家に帰ればいつも母さんが料理を
作って待ってくれていた、母さんの料理は
どれも美味しく毎日が楽しみだった。
だけど今は…
とりあえず腹が減ったので
冷蔵庫を開けてみた、予想通りあるのは
牛乳、ビール、昨日コンビニで買った
食いかけの焼きそばしかなかった。
仕方なく今あるもので我慢した。

「いつからこんな生活になってしまったんだろうな」とつぶやいて
いると

自然と母さんの仏壇の前に足を進めていた。
母さんの写真を手にとり眺めていた。
「母さん…」写真を元の場所に戻そうとするとそこには紅蓮色に染
まっている

一つの紙が置いてあった。
今まで写真の裏にあり気づかなかったんだろうと思いその紙を手にした瞬間、頭に強烈な痛みが走り俺はその場に倒れた。

気が付くとそこは見渡す限りの広い
草原だった。
「ここは何処だ…」と言ったその時
「ウゥゥグガァ」と何かの唸り声が聞こえる
振り向くとそこにはこの世のものとは
とても思えないいびつな形をした
生物がいるではないか。
テストの平均点が２４点の俺でも一目で危険だと分かるほどのオーラだ。

「こいつは何だ…」俺は一目散に逃げた
だかその生物は想像以上に素早い。

「ダメだ、追いつかれる」どんどん距離が
近づいていく、死を覚悟したその瞬間
俺の手が赤く光り出す。
「何だこれは…」俺の手の中にはさっき仏壇の中で見つけた紅蓮色の紙がある。
化け物が近づくにつれて光りはどんどん強くなる、そして俺と化け物の距離が
一メートルほどになった時光りは
化け物を示しそして化け物は一瞬で燃え尽きた…

「何だこの紙は、そしてここは何処だぁ？」

謎の少女「あいつ妖(あやかし)を倒しやがった…
いったい何ものなんだ…
それに陰陽師の札も持っていやがるし、
面白いやつだ」

第二話　異世界

俺はこの草原をひたすら歩いていた。
だが街など見つかりそうもなく俺は
一度休憩をする事にした。
「あの化け物はなんだったんだ…
そしてこの札はなぜ母さんの仏壇の中のあったんだ…」今までの事
を振り返っていると
後ろから声が聞こえた。
「またあの化け物か？」俺が身構えると
「そんなに警戒しないでよ！
私は味方だよ」そこには俺と同い年ぐらいの
少女が立っていた。
「君の戦いぶり見せてもらったよ。中々のもんじゃない、だけどま
だまだ使いれていないようだね！」
そう言われた俺は疑問ばかりだ
「まずお前は誰だ、そしてここは何処だ
この札もあの化け物もいったいなんなんだ？」
「人にものを尋ねる時はまず自分からって
言うじゃん（笑）」
「俺の名前は進藤優斗」
「わたしの名前は秋本光、そしてこの世界は
異世界
Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｗｏｒｌｄ、妖とそれを倒す者たちがいる世界よ」
俺は一瞬で分かった、さっきの化け物が
妖なんだと…
「この札は？」と俺が聞くと
「その話は歩きながらするわ、とりあえず
わたし達のアジトへ行きましょう」

俺は光の後を追って行った。
「まず何から話そうかな～」
「この世界について教えてほしい」
「分かったわ。さっきもいった通りこの世界には妖と呼ばれる生物がいるの。
そいつらはみただけで危険とわかるように
行動も危険なの、簡単に人を殺す
ような冷酷なやつなの…
そして私達はその妖を退治する
陰陽師なの。あなたが持っているその
札は陰陽師の札なの、どうしてあなたが
それを持っているかはわからないけど
それは妖を除去する働きが込められているの」
そっかだからあの時俺はあいつを倒せたんだ…
「この世界には陰陽師以外にも武闘派、
武器使いの2つのグループがあるわ
陰陽師も入れてこの3グループはどれも対立関係にあるの」
「どうして、仲間なら協力すればいいのに…」
「それは出来ないの…最初は協力していたの
だけどある事に気付いたの」
「ある事…なに？」
「妖をたおすとその亡骸の上には秘宝が
置いてあるの…その秘宝は倒した人の使う
スタイルによって変わるの、例えば陰陽師が倒せば札が武闘派が倒せば新たなスキルが
武器使いが倒せば特殊な武器が…
それを知ってからはどのグループもその秘宝を狙った。そして気が付けばグループどうしでの戦いも始まるようになったの」
「なんか複雑な話しだな」
「うん、着いたわよ。ここが私達のアジトのある街ウィステラよ」

「なんて広い街なんだ…」俺は唖然としたままその街を見渡した

第三話　陰陽師はじめました

俺は唖然としたまま一歩も動けなかった。
光とともに広い草原を抜け辿りついた街
“ウィステラ”それは想像を絶するほどの
素晴らしさだった…
「ねぇ行こう？」俺に問いかけてきた光
俺が一歩も動かないので不思議な顔を
していた。
「うぅん」
ウィステラはとても賑やかな街だった
広場に着くと商人達の声、子供達のはしゃぎ声などが絶えず聞こえ
てきた。
「ここは賑やかな街だな」

異世界

「ウィステラはねＡｎｏｔｈｅｒ　Ｗｏｒｌｄの中で三大都市と呼
ばれるほどの広さを誇っていて
一番平和で賑やかな街なんだよ？」
「そっか～ところで陰陽師のアジトは何処にあるの？」
「ここだよ？」光の指の先には
三階だての少し古臭さを感じさせるが
がっしりと立っている建物あった
「ここがアジト…」俺は緊張し始めてきた
この先にいるのはきっと…
～～～～～～優斗の想像～～～～～～～～～
「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」
「死者よ安らかに眠れー？」
優斗「怖えぇ～～」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
陰陽師ってこんな感じだよな…
だけど光を見ていると俺の想像とは違うような気がしてくる…
「なっなにジッと見てるのっ？もう行くよ？」
そういうと光は顔を真っ赤にして
中に入って行った。
「ちょっと待てよ？」俺も後を追い扉の前で
深呼吸をして扉を開けた

そこは俺の想像をぶち壊す世界だった…
「お〜いビールをくれ」
「おぉ新人か〜宜しく」
「光おかえりなさい」
とても賑やかだった…
「どうしたの優斗？」俺は光の一言で
正気に戻った
「陰陽師ってこんなに賑やかだったんだな」
「そうだよ？陰陽師は仲間思いで賑やかなんだよ？それに比べ武闘派は一匹狼の集まる
冷酷な奴らなんだよ」光は感情を強めて言った
「陰陽師と武闘派の間に何かあったの？」
「うん、それはね…」すると光の声をさえぎるように低く太い声が
光を呼んだ
「光、そしてそこの若僧こっちに来い」
「あっマスターだ」
「マスター？誰だそれは」俺は尋ねた
「各グループにはそのグループをまとめる
マスターと呼ばれるリーダーがいるんだよ」

その話を聞きながらマスターの前に足を進めていた。
「おい若僧、お前の名はなんだ」
「進藤優斗」
「進藤か…（こいつなんだ…ただならないオーラを感じるぞ）ここにきたからには
覚悟はできているんだろうな」
「覚悟？」
「陰陽師となり妖と戦う勇気はお前にはあるのか」
ここまで来たらならなきゃいけない
空気だな…「分かったよなってやるよ」
こうして俺の陰陽師生活が始まった

第三話　陰陽師はじめました（後書き）

第三話が終わりました！
ようやく陰陽師になりましたね…（笑
そこでここからもっともっと言い作品を作りたいと思うので意見、
感想などを
聞かせていただけたら幸いです！
これからも宜しくお願いします！

第四話　陰陽師は複雑だ…

陰陽師になるとは言ったものの
いったいなにをするんだろう…
と思い質問をしてみた！
「マスター俺はこれから何をしていけば
良いんだ？」
「簡単に言うと妖を倒す事だな」
……無理だ
「もう少し詳しく教えてくれ？」
「わかった、まず陰陽師には階級というものがある、下から見習い
陰陽師、下級陰陽師
中級陰陽師上級陰陽師、最上級陰陽師そして
マスター陰陽師だ。見習い陰陽師は修行をし試験を合格する事によ
り下級陰陽師に
昇格する事が出来る。進藤お前は今は見習い陰陽師だこの後に俺が
直々に修行をしてやろう」
「ありがとう…（俺はなにをされんだ）」
「マスター陰陽師に昇格する事により
一つのアジトを任せれるようになる。
階級ごとの違いについて教えよう
陰陽師は札を使う、使える札は階級によって違い階級があがるごと
により強い札が使えるようになる。そして妖の秘宝の札をつかえる
のは上級陰陽師からだ。階級をあげるには
毎年行われる階級対戦の結果により決まる」
「階級対戦？なんだそれは」
「階級対戦とは同じ階級どうしの陰陽師が
戦い一位をとれば次の階級の最下位の
陰陽師への挑戦権が与えられる。その戦いに勝てば昇格と同時に最

下位の陰陽師は降格このようにローテーションの仕組みとなっている」
「へぇ～そっか（分からん…全く分からん）」
「よしこれで大まかな説明は終わりだ、
今から早速修行に行こうと思う
進藤いいな？」
「あぁ、良いぜ」そう言うと
マスターは白色の札を出しその札を床に
投げ「印」と言ったと同時に俺はアジトから
あのばか広い草原にワープしていた。
俺は少し興奮していた、陰陽師になれば
こんな便利な事が出来るのかと感激していた
「進藤、準備はいいか」
「あぁ良いぜ早速修行開始といこうか」

第四話　陰陽師は複雑だ…（後書き）

すいません少し複雑になってしまいました
階級対戦についてはもう一度
説明したいと思うので今回は許して下さい…
ついでに、少しでも面白いと思ってくれたならお気に入り登録して
くれれば幸いです！

第五話　修行開始

俺は今、マスターと修行中だ？
「良いか進藤、もう知っているとは
思うけど陰陽師は札を使って戦う
この札には三つ種類がある一つは攻撃的な
札、二つ目は補助的な札最後は
妖の力が加わった秘宝の札だ」
「秘宝の札か…」
「まぁお前にはまだ早い話だな。
それじゃあ少し使ってみようかな。ほらっ」
「これは札？これを使えばいいんだろ？」
「そうだ、使い方は…」マスターはそう言うと札を横にあった木に
投げ「印」と唱えると
木は氷ついた…
「す…すげぇ」俺にも出来るんだろうか…
「それじゃあ俺と同じく使ってみろ」
俺はさっきマスターが投げた木と同じ木に
札を投げて「印」と唱えた…が札だは少し
燃えただけで氷ついた木には無反応だった…
「まだまだだなぁそこに札だを大量に
置いてある、お前の試験内容はあの木の
氷を溶かす事だ言っておくがあの氷は
中級陰陽師でやっと溶かせれるレベルだからな」
「上等だぜぇ…やってやるよ？」（ふざけんなまだ始め使うって
うのに無理だろう）
「じゃあ、頑張れよ」そう言うとマスターは
消えていった
「ちくしょう…やるか…」

俺は札を一枚とり木に投げ「印」と唱えたが
変化は無かった…
「大変だね！」突如後ろから声が…
「誰だっ？光か、なにしにきた」
「応援しにきた？そういえば優斗はもう一枚札を持っていたよね？」
「あぁ、だけど妖を倒す時に
使ったからもう持ってないぞ」
そう言ったら光は俺に手を出したきた
「はい？」光の手の中にはあの時の札が
入っていた
「どうしてこれが…」
「あの後、妖の秘宝を取りにいったら
この札があったの？普通の札は一度使うと
無くなるのになんであったんだろうね？」
「ありがとう…そうだ？この札を使えば
あの氷を溶かす事が出来るんじゃないか？」
俺は、この札を木に投げ「印」と唱えた
すると氷はどころか木が燃え尽きた
「なんなんだ…この札強すぎる」
するとマスターがやってきた
「おぉずいぶんと派手にやったな
（こいつ木ごとやるなんて…何者だ）
よし試験は合格だ、今日からお前は
下級陰陽師だ」
「よしゃ？やっと俺の陰陽師としての生活が始まるぜ？」

第六話　始めてのお買い物（笑）

「陰陽師になったのは良いけど
俺はこれから何をしたらいいのか…」
俺は今、ウィステラの広場をあるいている
下級陰陽師になったご褒美として
マスターから1万チップ（1円＝約1チップ）
と赤色の札を5枚青色の札と5枚白色の
札を5枚と電子マップを貰った。
「とりあえず1万チップもある事だから
武器屋にでも行こうかな」
電子マップを頼りに店を探した。
「おっ！あったぞ、早速入ろう」
「いらっしゃい、最低限のもの
は揃ってるよ～」
～メニュー～
・回復薬・毒直し・麻痺直し
（下級陰陽師から使用可能）
・赤の札・水の札・青の札・黄の札・紫の札
・風の札
（中級陰陽師～使用可能）
・火炎札・凍氷札・雷神札・水流札・風神札
・毒殺札
（上級陰陽師～使用可能）
・威力倍増銃

「へぇー沢山あるんだな！この威力倍増銃
って俺達陰陽師って使っていいのかよ？
武器は武器使いのやつらが使うんじゃ無いのか？」

「これは札を使う銃なんだぜ！
使い方はこの銃は手に付けて射つ取り付け型でイメージは大砲の小さい感じの
を手に付ける感じかな、受講は勿論小さいけどな！」
「威力倍増っていうのは？」
「あぁ、この銃は札を沢山入れる事によって
そのぶんの威力を一気に放出する事が
出来るんだ。だがいれすぎると自分の
腕がぶち壊れるから上級陰陽師でも５枚が
最高だ、下級陰陽師は絶対に無理な話だな」
「面白い武器だな～じゃあ何か買っていこうかな…この札は持ってないなよし？
黄の札と紫の札と風の札を５枚ずつ」
「了解？ほらよっ？」
俺は店を出てまた広場をうろちょろしていた
「そうだ！さっき買った札の効果を
試してみよう？」俺は草原に向かった

第六話　始めてのお買い物（笑）（後書き）

ちなみに
・赤の札は火
・青の札は氷
・緑の札は風
・黄の札は光
・紫の札は毒
・水の札は水
・白の札は補助
です？

第七話　戦闘（前書き）

現在の持ち物
・７０００チップ・電子マップ
・赤、青、水、紫、黄、白、緑の札
各五枚ずつ
紅蓮の札

第七話　戦闘

「よしっ？到着」俺はあの草原に来ていた？
目的は勿論、札の効果を試すためだ？
「おっ？あそこにいい的があるじゃないか
あれで試してみよう？」
俺は的にはちょうどいい茶色の的を見つけた
「よしっ？まずは赤の札」
俺は的をめがけ札を投げ「印」と唱えた
すると札は燃え火は広がっていく
「よっしゃーすげー」と言っていると
的が動き出した「……あれ？」
よーく見るとそれは的ではなく魔物だった
「ああっ？そういえばマスターが
言っていたような」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「進藤お前は下級陰陽師に昇格したよな？
そこで一つ言い忘れていた事がある」
「何だよ言い忘れていた事って？」
「この世界には妖だけではなく
魔物と呼ばれるモンスターがいるんだ
それは妖には到底およばない程の物から
妖と同レベルの魔物までいる。下級陰陽師のお前には少し危険な物
もいるから
気をつけてろ」
「了解〜」
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「もしかしてこいつわ…魔物だぁ？」
その魔物は外見は熊見たいだが頭に一本角が

あり俺と同じくらいの大きさだった
「グゥ…ウガァー？」だいぶご立腹のようだ…
「ヤバイ…何でもいいから札を使おう？」
かばんから札を出し投げ「印」と唱えた
すると熊の火が消えて回復していく
ではないか…「補助の札投げてもうた？」
熊は元気になり角を向けて走って来た
「ヤバイ、ヤバイ…とりあえず投げろ」
そして俺は緑の札を投げた「印」すると
突如熊の周りに風が吹き熊は吹き飛ばされ
壁に体をうち気絶していた
「よっしゃー？今だ」俺は水の札とり投げ
「印」熊の上から大量の水が流れてきた
「今だ？」俺は黄の札を投げ「印」
すると熊の上に大量の雲が集まりだした
「これで終わりだぁ？」雲から雷が落ち
水びたしの熊には効果抜群のようだ
「よしゃ？勝ったぜぇ…」俺は疲れてその場
で倒れてしまった…

マスター「あいつがあそこまでやるとは
少しは頭も良いみたいだな…」

第八話　陰陽師ＶＳ武闘派ＶＳ武器使いＶＳ妖　前半戦

「っはぁ～よく寝た」
気が付くとそこはアジトのベッドの上だった
「やっと起きたかぁ…かれこれ二日は
寝ていたぞ」マスターが言った。
「そうだ、進藤お前にこれから試練を
与える」
「何ですか？」
「ここから南にあるデフォー砂漠に
妖が現れた、今から行きそれを退治してほしい」
「俺が一人でですか？」無理…無理無理～
「お前は何もしなくてよい見学をしてこい
中級陰陽師を一人、上級陰陽師を一人
付けておくから問題は無いだろうそいつらは
アジトの外で待っている少し勉強してこい」

「ここら辺かな～」探していると
「優斗？」後ろから光の声が
「中級ってもしかして…光だったのか？
ってか光って中級だったの？」
「言ってなかったっけ？そう私中級なの？」
「てっきり光は下級だと思ってた（笑）」
「ひど～い」すると後ろからまた声が
「もう行くぞ…」
「あなたが上級陰陽師の人ですか…？」
「あぁ、牙竜っていうよろしく」
「よろしくお願いします（かっこ良い…）」

デフォー砂漠まではそんなにかからなかった
「今回の妖は俺一人でやる、
光は他グループ戦ってくれ、進藤は今回は
見学だが状況に応じて光の援助を頼む」
光・優斗「わかりました」
「着いたぞ」ここがデフォー砂漠…
そこまででかくは無いが石の塔など
障害物が多い。
「なぁ光、他グループと戦うってどういう
意味だ？」
「前にも言った通り妖は陰陽師だけでなく
武闘派、武器使いも狙っているの当然
妖が現れたら三グループは会う事になる
そこで秘宝をとるためには必然的に
戦わなきゃいけないって事だよ？」
「そっか～緊張するな…」
「よしここから分かれるぞ俺は妖を探す
二人はここで他グループとの対戦に備えていてくれ」そう言うと牙
竜さんは
いなくなっていった

～～～～～～～～三十分後～～～～～～～～
「なかなか来ないな～」眠りかけていた
その時「バン、バン」
「何だ、何だ？この爆撃は」
「来たわよ…武器使いの奴らが」

第九話　陰陽師ＶＳ武闘派ＶＳ武器使いＶＳ妖　後半戦

俺たちは今、デフォー砂漠で戦闘中だ？
「武器使いめイキナリ爆弾投げてきたし
危ねえだろ？」
「優斗下がってて…ここは私が行く」
「分かった。頑張れよ」
武器使い「何だよ、出てきたのは女か…
ずいぶんとなめられたもんだぜ」
「女だからって甘くみたら痛い目にあうよ」
武器使い「俺には時間がねぇんだ
最初からとばしていくぜ？
いでよ妖の力をまといし迅速なる銃
“秘宝”高速のバリスタス」
「あれは秘宝？」
「何だよ、あれは光教えてくれよ？」
「あれは、秘宝よ。秘宝は妖の力を
まとっているのその力は妖の力と瓜二つなのしかもその秘宝を使っ
ている時は
武器だけでなくその人の能力も上がるの
だからきっとあいつも…いない？」
「俺の秘宝のポイントはスピード」
「光？後ろだ？」
「もう遅い？バァン、バァン」
「光？」
「だ大丈夫…優斗、お願い協力してほしい」
「分かったぜ？」俺はまず白の札を光に投げ
「印」そして回復させた
「待っていろよ？この進藤優斗様がせいばいしてやる？」

赤の札をとり投げ「印」
「いけーファイアーボール」札は火の玉となりあいつ目掛けて進んでいった
武器使い「遅い」
「またいなくなった？」
「優斗後ろだ？」
「ありがとう光？」
俺は緑の札を出した、そして俺のいる地面目掛けて投げ「印」と唱えた
風が吹き俺は吹き飛んだ
「風の勢いを使い逃げやがった？」
「戦いはまだまだこれからだ？」

第九話　陰陽師ＶＳ武闘派ＶＳ武器使いＶＳ妖　後半戦（後書き）

終わらなかったので
次に陰陽師ＶＳ武闘派ＶＳ武器使いＶＳ妖
最終戦とします…
すいませんでした…

第十話　陰陽師ＶＳ武闘派ＶＳ武器使いＶＳ妖　最終戦

俺はまだ戦闘中だぜぇ？
「ちくしょー攻撃が全部あたらねぇよ？」
「優斗、私も戦うよ？」
「光？もう怪我は良いのか？」
「だいぶ良いよ？それより私の札は
優斗のより一段レベルが上だからここからは
私がやるよ、そのかわりさっきの戦いを見てたら優斗、頭いいみたいだね？だから
命令をだして、その通りに戦うから」
「分かった（考えろ…考えろ…何かあるはずだ…あいつは音速…音ならこっちは光だ？）
光？何かあいつのの動きを止めれる程の
光を発する札ないか？」
「あるよ？光輝の札？優斗目を閉じてね？
『印』」
武器使い「うわぁ」
「光？今だそこから氷の札を使え？」
「分かったわぁ凍氷の札『印』」
氷は武器使い目掛けて飛んできた。
「緑の札？『印』」俺は敵の後ろで唱えた
風で敵は氷目掛けて飛んで行く
「スピードが増すぶんダメージも増す
自分のスピードがまさかこんな裏目に
でるとはな、いい戦いだったぜ？」
「やっと終わったね？やっぱり
優斗は頭が良いよ？」
「いやぁ～それ程でも（笑）」

俺がデレデレしていると
後ろから声が「敵か？」
「牙竜だよ。終わったか？こっちは
無事終える事が出来た。」そう言い手には
威力倍増銃と見た事のない色の札があった
「それが…秘宝？」
「あぁそうだ…」凄い…あの札は他のとは
違う何かを感じる…そうだこの札も
そう思い俺は紅蓮色の札をだした
「この札はいったい…何なんだ」
帰ったらマスターに聞いてみよう。
よしとりあえず帰ろう？

第十話　陰陽師ＶＳ武闘派ＶＳ武器使いＶＳ妖　最終戦（後書き）

十話が終りました？
ここからもっといい作品を作りたいので
感想、要望などをお願いします
そしてお気に入り登録お願いします

第十一話　ついに階級対戦開始？

「ついた～」俺は砂漠での戦闘を終え
アジトの前まで帰って来ていた
「とりあえずマスターの所にいこう！」
俺は中に入りマスターの所まで行った
「お疲れ、無事終える事が出来たんだな
どうだった上手く戦えたか？」
「あぁ戦えたよ！それよりこの札なんだ
けど…」俺はそおいい紅蓮の札をだした
「見た事のない種類の札だな…
秘宝の札とも少し違うような、だけど
何か凄いオーラが感じられるよ」
「そうですか…マスターにもわかんない
なんて、いったい何んなんだろう」
「そうだ、進藤、お前に伝えなきゃならない事があったな。」
「なんですか？」
「お前達がいない時に決まったんだが
二週間後に階級対戦の開催が決まった」
「っえ～そんな、俺こっちに来てまだ一週間もたってないよぉ？や
っと札の使い方覚えたレベルだしどうすんの～」
「慌てるな？だからお前には特別に
先生を付けてやるよ？」
「誰、ですか？」
「お前には牙竜が直々に特訓してくれるよ」
「まっマジですか？めっちゃ嬉しいよ？
良いんですか牙竜さん？」隣にいた牙竜さんに聞いてみた
「あぁ俺でよければ教えてやるよ」
よしっ驚異的な進化で最強になってやる？

っと誓った優斗であった

第十一話　ついに階級対戦開始？（後書き）

次回は修行の様子をのせたいと思います

第十二話　こんな修行で大丈夫？

強くなると誓ってから早くも
一週間がたち俺は不安になってきた…
この一週間ずっと俺は折り紙を折っている…
「あの～牙竜さん、こんな事をして
ほんとうに強くなるですか？」そういう
俺の横には千羽鶴ならぬ一万鶴ぐらいの
鶴がある…
「もう良いかな…よしっ札を使ってみろ」
「え？札ですか？分かりました」そお言い
俺は緑の札をだし「印」と唱えた
するとどういう事だ前までの風とは
全然違うこれは台風並のスケールでは無いか
「えっ？何で？何でこんな凄い事になってるの？」俺の頭の中は？
マークだらけだ
「進藤、お前に足りないのは一つの物に
集中する力が足りなかったんだ
だからこの一週間ひたすら折り紙に集中
してもらったんだ」
「だからずっと俺はこんな事をしてたのか」
「ここからはお前にある事を教えよう
どの陰陽師も必ず得意な札の種類ってのが
あるんだよ。ちなみに俺は氷、お前にも
あると思う。今まで見てきたところ
お前は多分火だ」
「俺の得意なのは火なのか…」
「ここはから得意技に磨きをかけていく
あとお前が持っているその特別な札」

「紅蓮の札の事ですか？」
「それ今使えるか？」
「俺はそう言われ『印』」と唱えただが
何も起こらない…
「あれ？おかしいな…」俺は何度も試したが
結果は同じだ…
「やっぱりな…進藤、お前はそれを
扱えてない、それを扱う事が出来れば
お前にとって凄い武器になる、だから
今回の修行では得意技と紅蓮の札を中心に
修行をしていく？」
「じゃあ早速やりましょう？」
俺の最強への修行が始まったそして…

～～～～～～～～一週間後～～～～～～～～
「進藤優斗改、参上？」

第十三話　進藤優斗“改”

「進藤優斗改、参上？」
「優斗？久しぶり？」そこには光りがいた
「おう？久しぶり？」
「修行の成果がでるといいね？」
「うん」すると中央からマスターの声が
「ええっと…そろそろ始めようかな
ただいまより第…第何回だっけ？」
「……」
「まぁいい今年度の階級対戦を開催する？」
陰陽師達「おぉ？」
「おおまかな説明をする
トーナメント戦の四回戦となっているそして
その四回を勝った勝者が次の階級への
挑戦権を獲得できる、逆に最下位決定戦も
あるのでそこを心得てください
下級陰陽師は一階へ、中級陰陽師は二階へ
移動してください、そこに対戦表も
あるので」
「えぇっと俺は最初じゃねえか？
相手は富士谷葵ねぇ今から十分後かぁ
とりあえず、札の整理でもして時間潰すか」

〜〜〜〜〜〜〜〜十分後〜〜〜〜〜〜〜〜
「えぇっと今から富士谷葵と進藤優斗の
試合を始める、勝敗の決定は降参をするか

試合が出来ない状態になるかだ、
準備はいいか？」
富士谷「はい…宜しですよ」
俺「いいぜ（何だよ相手は
メガネさんかよ（笑）これじゃあ速攻で
終わるな周りには透明のバリアが
あるみたいだし思う存分に戦えるぜ）」
「それじゃあ始め」
「すぐ終らすぜ？紅蓮の札ぁ？『印』」
俺の周りには龍の形をした火よりはマ
グマ的なものが集まりだした…
「炎龍の暴走」↑技の名前（笑
富士谷「うっ…うわぁ？」
「弱っちいなぁおとと い来やがれ？」
「えぇそこまで…勝者進藤」
「よし順調なでだしだせ？」
陰陽師達「なぁなんだよあの新人強すぎるよ？」
「見んな俺に向かって言ってくれてるんだなそんなに言ったら照れ
るじゃないかよ」
優斗はそう言い周りを見ると
皆の視線は別会場を見ている
優斗「なっ…何があったんだよあそこには」
となりの会場は跡形もなくなっていた
ただそこには一人の少年が立っていた
「誰だよあいつ…俺の英雄伝説がぁ…」

第十四話　ライバル登場？

「誰だよ、あいつ…」
俺はまた唖然としていた、いったいこの世界では何回唖然とすれば良いんだ…
さっきまで行われていた一回戦…俺は圧勝だっただがそれよりも大変な事が隣の会場で起こっていた…
「会場ごとめちゃくちゃじゃねぇか…あんなやつが下級陰陽師だなんて…」
するとそいつがこっちに向かってきた
「えっ？なになに、俺なんもシテマセン笑」
「お前が進藤優斗か、何だよ兄さんが言う程のオーラは感じられねぇぞ」
「お前…誰だよ？何でおれの名前を知ってんだよ？」
「俺の名前は牙竜星夜（がりゅうせいや）お前の師匠の弟だよ…まぁ俺は尊敬なんかしてないけどな」
「牙竜さんの弟？だからこんなに強いのか」
「進藤、お前は決勝戦で倒し俺は兄さんを超えた事を証明してやる。だから俺が倒すまでやられるんじゃねぇぞ」そう言うと何処かに歩いて行った…
「何なんだよあいつ…俺はお前に言われなくても決勝戦までいきお前をぶっ倒してやるよ？
だけど二回戦は明日かぁ～
じゃあ防具屋でもいこうかな。
一回戦に買ったから賞金も来てるし」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「つらっしゃい」威勢のいいおっさんがいる
「防具を買いにきたんだけど」
「おぉ、あるぜ?防具はな種類によって
能力が上がるんだぜ?例えば風神の衣は風系の能力が上がるよ?お
たくは何が希望?」
「俺は火を上げたいなぁ」
「じゃあ火炎の衣がいいかな、
これは来た人の周りに常に火の玉か浮いていて簡単な攻撃は燃やす
ことが出きるぞ」
「じゃあそれにします?」俺は一万チップを
だし「お釣りはいらないぜ」といい店を
出ようとしたら「おい!五千チップ足りないぞ」
「えっ?(恥ずい…恥ずすぎる…)」
俺は足りない分をだし足早にここを出た
「とりあえず、新しい防具も手に入れたし
これで次も楽勝だな?(笑」

第十五話　決死の第二回戦Ｐａｒｔ１

「やっと始まるよ…」

あれから防具を買ったのはいいものの
あまりにも早く終ってしまい何もする事が
無く暇だった…

審判「ええっとこれから二回戦始めるんで～
そろそろ集まってくださ～い」

こんな審判で大丈夫かよ？
俺は大きな不安を抱え会場へと足を進めた

「ええっと対戦相手は…高木佑磨（たかぎゆうま）ね」

「それじゃあこれから第二回戦を始めます
開始？」

「よし」赤の札をだし「印」と唱えた

やはり修行の成果か、今までは“火”だったが
今は“炎”と呼べる程になっていた

「ビッグファイアーボール
いけぇ？」

それは敵をめがけてさらに威力を増して
進んでいった…

高木「…しょぼ、水の壁（ウォーターウォール）」

「何だよ、いきなりデッケー壁出て来たし」

火は水に属性不利だ、みるみるうちに
火の球は水の壁に吸収されていく

「これじゃあ俺の修行の成果がぁ…」

何かあるはずだ…
やっぱり水なら雷でいくのがセオリーか？
だけど俺の雷なんかWiiのリモコン1時間分
しか電力はないぞ？
ダメだぁ～考えろ…
ってかさっきから俺の周りを回ってる
火の玉、邪魔くせぇぞ？普通の防具に
すれば良かった…
んぅ？待てよこれを上手く使えば…

「お前を倒す秘策思いついたぜ？」

第十六話　決死の第二回戦Ｐａｒｔ２（前書き）

今度からはいちいち、札を使い印とかは
やらないので…ご了承を

第十六話　決死の第二回戦Ｐａｒｔ２

「ビッグファイアーボール？」

高木佑磨「進藤…お前は馬鹿か？さっき
ダメだった手が通用するとおもってるのか？
ウォーターウォール？」

当然のように防がれた、だがそれで良いんだ

「札の弱点…それは一度使ったらその技が
完全になくなるまで同じ札は使えない
ことだ？その、壁消えるまでの時間がなげぇんだよ？緑の札？つむ
じ風？」

俺の周りには
風がおきた…そしてさっきまで俺の周りに
あった火の玉は風の力をで高木に向かって
いった、

高木「ちくしょ…うぜぇんだよ？氷の札？
氷流弾」

「遅えよ？」
風の力をかりていたので
スピードが増し威力もふえていたいた
そして高木の札が発動する前に
火の玉は直撃した

「ぐわぁ？」

「勝った～今回は少してこずったかな…」

審判「終わり～勝者進藤ね」

毎回思うが審判適当すぎじゃね？

「とりあえず勝ったなぁ、だけど
一回戦の相手よりいきなり強くなりだしたな今度も強いのかな？」

悩んでいる俺の後ろで聞きなれた声が

「優斗？順調に勝ち進んでいるね？」

「光？最近会わないと思ったら
光は中級だもんな？そっちは順調？」

「うん？無事に二回戦突破だよ？」

「そっか～じゃあこのまま勝って
昇格しような？」

「うん？優斗大好きだよ？」

「うん？そんな事知ってるよ…ん？
えぇ～？俺の事好き？」

幕間　牙竜星夜（前書き）

今回は牙竜星夜の過去を話したいと思います

幕間　牙竜星夜

「ムカつくんだよ…進藤も、兄貴も」

１４年前…
俺は陰陽師といえばと必ず名前のでてくる
超エリート牙竜家の次男として産まれてきた
物心つく頃から札を持っていた、
エリートばかりの牙竜家の中でも俺は
さらに天才と呼ばれてもいい程の能力を
持っていた…
けっして呼ばれる事は無かったが…

俺には６歳年上の兄がいる、俺の人生を
狂わせた最悪で最強の兄だ。
兄は俺なんかとは比べ物にならない程の
強さだった、そう「１０００年にひとりの逸材」
なのだ…

「星夜どうしてお前は兄と同じ事が
出来ないんだ？」
「とても同じ血が流れているとは思えないわね～」

俺はいつも比べられ侮辱され
続けていた…

「どうして俺が馬鹿にされなきゃ
いけねぇんだぁ？」

そして俺は誓った…
「俺が大人になった時に必ず兄を
倒し超えておれを馬鹿にしたやつらを
見返してやる」

これが俺の今までの人生だ
そしてここにきてとても良いシチュエーション
ンが出来た…

それがあいつの弟子の進藤優斗との
戦いの機会だ…ここであいつの直属の
弟子を倒せば、あいつと黙ってはいないだろう…

せいぜい勝ち進んでくれよ
進藤…優斗

第17話　融合技

「毎度あり～」

俺はまた買い物に来ていた！
最近よく来ているな～
来た理由は札の補充だねーうん！
・火の札
・風の札
・光の札（新）
・雷の札
・闇の札（新）
・氷の札

他にもあったけど使わなそう
だからいいや～
俺が店を出ようとした時に店主さんに
止められた

「ちょっと待ってくれるかな！
あんたはいつも沢山の札を買ってくれて
本当に助かってるよ～（最近は不景気で…）
だからとっておきの情報を教えるよ！
これを上手く使えれば試合を有利に
進められるよ！」

「何ですか？」

「札の合成ってのを知ってるかい？」

「札の…合成？知らないよ」

「そっか～俺の知り合いに札の研究家がいてな、そいつが札は合成できる事に気付いたんだよ！そしてそいつが作ったのがこの武器“威力倍増銃”」

この前牙竜さんが使っていた武器だ…

「この銃はな札を入れるとその力が弾のなって出てくるんだ…これだけなら普通に札を使ったのと変わらないがこれは札を複数いれる事が出来るのだ？例えば火の札を五枚入れると五枚分の威力が一つの弾となるのだ！そしてこの銃最大のポイントは…別の種類の札を入れて融合技を使う事が出来るのであ～る？」

「……融合技？何だそれは？」

「話すと長くなるが…まぁいいっかここで全ての札の特徴を教えよう

・火～攻撃の属性
・水～防御の属性
・風～スピードの属性
・光～活性の属性
・雷～硬化の属性
・闇～増殖の属性

だな、まぁだいたいはわかると思うが
例をだして説明していこう？
まずは活性についてだ例えば
火と光が融合すると火の攻撃の属性に加え
光の活性の効果により
火が威力をまし炎になる

次は硬化だ？
水と雷を融合すると水の防御に加え
雷の硬化も加わりさらに頑丈な防御となる

最後は増殖についてだ
火と闇を融合すると火の攻撃に加え
闇の増殖も加わり火の攻撃は増えていく
まぁこういう感じで合成する事により
さらに強くなるんだ？ゼェゼェ…」
さすがに疲れた…

「すっげぇ？だけど威力倍増銃は確か
上級陰陽師にしか使えないんじゃない？」

「そうなんだよ…確かに素晴らしい武器だが
負担が大き過ぎて上級にしか
使えないんだよな」

「俺も使って見たいなぁ～融合…」

「そんなあなたの願いに応えて
発明しましたよ？この“融合札”
この札は合成したい札をこの融合札の

上に重ねるとなんと？あっという間に
融合が出来ちゃうんです？」

「えぇ～凄い？だけど値段が気になる？」

「いいえ大丈夫です、誰にでも買えるようにと初回だけ五枚まだ無料で差し上げます？」

「えぇ～すっげぇ？じゃあ貰ってくね？
じゃあね～」

「ちょっと待ってよ？行くの速すぎるよ～」

よしっ？新たな武器も手に入れたし
早速草原にいき威力を為すか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9305z/

陰陽師はじめました

2012年1月6日11時31分発行